

トナカイ飼養と中薬文化

―ポスト「北方の三位一体」を生きる大興安嶺のエヴェンキ族―

卯田 宗平

●日本でも、中国でも

日本各地のドラッグストアで「厳選した天然素材を配合した」という売り文句のサプリメントが販売されている。このサプリメントには、サソリやコブラ、スッポン、オットセイ、マカといった、いかにも疲労が回復し元気が出そうな動植物が配合されている。

このサプリメントのなかにトナカイの角も配合されている。厳しい自然環境のなかを生きぬくトナカイ。その幼角には滋養強壯の薬効があるという。

隣国中国でも身近にある、ある

切り取られたトナカイの角。世帯別に分けて置かれている(2011年8月筆者撮影)

いは辺境に生息する動植物にさまざまな薬効を見出しってきた。中国では、主に天然由来の産物からなり、体質の改善や体調の維持のために

服用される薬を「中薬」と総称する。そして、中薬の原材料になる動植物の飼育や栽培、採取が盛んに行われている。

もちろん、トナカイの角も例外ではない。中国では、トナカイの角に「補精神(精力を増強する)」や「助腎臓(腎臓の機能を助ける)」「強筋健骨(筋肉や骨格を強く健康的なものにする)」といった効能があるとされる。乾燥させ、チップ状に加工されたトナカイの角を温水やお茶、酒のなかにいれて飲むとさらに効果があるとされる。中国ではこうした薬効があるトナカイの角に高い商品価値がある。

日本のサプリメントに配合されているトナカイの角はロシアから輸入されたものであるという。一方、中国国内で流通するトナカイの角は、主に大興安嶺森林地帯で

トナカイ飼養を続ける人々から供給されたものとされる。

●大興安嶺とトナカイ

大興安嶺は中国東北部を南北に走る長さ約一二〇〇キロメートルの山脈である。カラマツやシラカバといった寒温帯に多くみられる樹木が優占する大興安嶺は、戦前に今西錦司や梅棹忠夫、吉良竜夫などが踏破したことでも有名である。当時、彼らは大興安嶺を移動中にトナカイ飼養に従事する人びとを観察している。

この大興安嶺では、現在でもトナカイを飼養している人たちがいる。中国の少数民族・エヴェンキ族らである。エヴェンキ族らが飼養するトナカイは、南モンゴルから北モンゴルおよびアルタイ山脈に分布するもので、シベリアの森林トナカイと呼ばれるものである。

現在、エヴェンキ族らはトナカイキャンプ地(以下、キャンプ地)に滞在しながらトナカイの飼養を続けている。大興安嶺に点在するキャンプ地は八カ所あり、そこで約三〇人がトナカイ飼養に従事している。

各キャンプ地で飼養されているトナカイの数はそのキャンプ地の労働力の多寡によって大きな違いがある。六人が滞在するキャンプ地では二〇〇〜三〇〇頭のトナカイが飼養されている。一方、トナカイ飼養に従事する人が少ないキャンプ地では所有数が二〇〜三〇頭程度である。

●ポスト「北方の三位一体」

シベリア・極北から東北アジア地域では、小規模なトナカイ群を交通手段として利用しながら狩猟採集を行う生業様式をみることが出来る。中国のエヴェンキ族らもかつては大興安嶺において狩猟と漁撈、トナカイ飼養といういわゆる「北方の三位一体」の生業様式を続けていた。しかし、現在のエヴェンキ族らは、移住・定住政策や大興安嶺天然林保護政策などの影響により狩猟および漁撈活動を一切行っていない。

狩猟活動を終えたことにより、

狩猟時の駄獣や乗用獣として利用されてきたトナカイはその役割を終えたかにみえた。しかし、エヴェンキ族らは狩猟と漁撈という「三位一体」のなかの「二位」がなくなった現在でもトナカイの飼養を続けている。

エヴェンキ族らがいまでもトナカイ飼養を続けるのは、トナカイの角を採取し、仲買人や観光客に販売するためである。彼らは、トナカイを殺さず、角を毎年採取し、それを販売することで生計を維持しているのである。角を販売するためにトナカイを飼養することとは、肉生産を主目的とするスカンジナビア三国やツンドラでのトナカイ牧畜と大きく異なる。

●トナカイの角に価値をみいだす

トナカイの角に価値をみいだし、商品化を行ったのは一九八四年以降である。一九八四年、郷政府（地方政府のこと）の幹部がトナカイの角を北京の研究所に持ち込みその成分を調べた。すると、トナカイの角にはさまざまな薬効があることが分かった。

この結果を受けた郷政府はトナカイの角を加工し、中薬の一種と

して販売することを決めたのである。郷政府は当時からトナカイの角の専売制を実施し、角の採取から運搬、加工、販売までの全過程を管理していた。

ただ、一九八〇年代はトナカイの角の存在が一般にあまり知られておらず、販売価格も低かったという。その後、一九九〇年代中頃になると、徐々にトナカイの角の薬効が認知され、それに応じて販売価格も上昇したという。

さて、トナカイの角は以下のよう加工され、商品化される。エヴェンキ族らはまず切り取った角を七〇〜八〇度の湯のなかに短時間入れ、角の殺菌と血液凝固を行う。その後、湯から取り出した角を室内につるして乾燥させる。角が乾燥した頃に再び七〇〜八〇度の湯のなかに入れ、湯から取り出して乾燥させる。

彼らはこうした煮沸殺菌と乾燥を繰り返して、最後に角が完全に乾燥するまで室内に吊り下げておく。その後、乾燥して軽くなった角を薄くチップ状に切つて袋詰めにし、仲買人や業者に販売するのである。また、加工したトナカイの角を民族工芸品や中草薬と一緒に自宅で観光客に販売する世帯もある。

●売れる角・売れない角

トナカイの角はすべて同じ価格で取引されているわけではない。角の取引価格は角の部位や状態によつて大きく異なる。

トナカイの角のなかで一番良いとされる部位は角の先端部分である。先端部分（加工後のチップ状のもの）の価格は五〇〇グラムで一〇〇〇元（一元＝約一五円）以上もする場合がある。一方、角の付け根の部分の価格は五〇〇グラムで一〇〇元前後である。

一頭のトナカイから採取できる角の量はトナカイの個体によつて大きなばらつきがある。体格が大きなオスのトナカイからは一頭あたりおよそ一〇キログラムの角がとれるが、体格の小さなメスのトナカイだと一頭あたり一〜二キログラムしかとれない。

●トナカイと生きぬく

とりまぐ自然や社会環境が変化するなか、エヴェンキ族らはトナカイの角に商品価値をみいだし、役畜として利用していたトナカイを引き続き飼養することで生計を維持している。

もちろん、こうした生計維持の方法はエヴェンキ族らのみで進め

られたのではない。大興安嶺におけるトナカイ飼養を考える場合、それを下支えする郷政府の働きかけも無視できない。

エヴェンキ族らはキャンプ地の周辺にトナカイのエサとなるトナカイゴケが少なくなるとキャンプ地を移動する。移動には多大な労力が必要になるが、郷政府は山中を移動するエヴェンキ族らに大型トラックを提供し、移動をよりスムーズに行えるように補助をしている。

また、郷政府は、限られた集団内で交配を続けることによる近交退化を回避するためにロシアから新たにトナカイを導入したり、トナカイの角の販売先を確保したりしている。

中国国内に中薬を利用する文化があり、かつトナカイ飼養を各方面でサポートする郷政府があることは、エヴェンキ族らの生計維持にとつて重要である。駄獣や乗用獣としての役割を終えたトナカイと今でも生きることができるとは、こうした背景があるからである。（うだ しゅうへい／東京大学日本・アジアに関する教育研究ネットワーク機構、東洋文化研究所特任講師）